第２回　滋賀県社会教育委員会議における会議概要

期日：平成23年3月8日（火）
場所：滋賀県大津合同庁舎７Ａ会議室

１　開　　会
〇神部純一　滋賀県社会教育委員　委員長　挨拶

２　議　　事
（１）平成２３年度社会教育関係団体・機関等の補助金交付について

（２）「園・学校を拠点とした地域連携の取組」調査について

（３）その他

３　閉　　会

＜出席委員（五十音順）＞
今居委員、宇川委員、宇野委員、神部委員、千歳委員、他谷委員、富山委員、中野委員、納谷委員、西村委員、野口委員、松浦委員、山口委員

神部　滋賀県社会教育委員会委員長挨拶

皆さん、こんにちは。第１回から本当に久しぶりに皆さんの顔を拝見したなというふうに思います。この前の会議の経緯というものは、皆さんの所に事務局から説明をしてもらったとおりでございます。いろいろ思いもおありでしょうが、国の施策の過渡期、また転換する部分ということもあって、事務局の方でもごたごたしてしまったということでした。

本日は、事前に皆さんにご意見を頂いた上で作成をしたアンケート調査「園・学校を拠点にした地域連携の取組調査」の結果について、一部ですが結果も出てきましたので、その結果を皆様に見ていただき、ご意見を伺いたいと思っております。

今回の会議での一番大きなテーマは、学校支援ボランティアと子どもそして先生を含め、学校との関係をどう築いていくのかということになると思います。一般に学校支援ボランティアは、学校の教育活動について地域の教育力を活かすため、地域人材や団体、企業などがボランティアとして学校をサポートする活動というふうに一般的には言われております。私は、地域が単に学校に協力することではなく、「三方良し」（学校にとっても良し、ボランティアにとっても良し、そして最終的には地域全体にとっても良し）というような、地域社会全体も豊かになる活動だと、私自身は捉えております。

連携と言いますが、連携が長続きするためには、どちらかが得をして、どちらかが損をするという関係では、長続きするものではなく、両方が得をする活動。そういう活動をいかに地域の中で根付かしていくのかが、重要な課題になると思っております。そういう意

味では、地域と学校の関係、そうした活動が今、何が一体問題になっているのか、何を解決すれば、学校にとっても、地域にとっても、そしてボランティアにとってもよりよい活動になっていくのかについて、意見をかわしていきたいと思います。
皆様にはそれぞれのお立場からいろんなご意見をいただきながら、最終的にこれからの学校、これからの地域のための指針となるようなものを考えていきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

議事の概要

（１）平成２３年度社会教育関係団体・機関等の補助金交付について

【委員長】
議事の方に入っていきたいと思います。「平成２３年度社会教育関係団体・機関等の補助金交付について」事務局から説明を宜しくお願いします。

【事務局】
［生涯学習課］
＜資料１＞、１頁をご覧頂ください。社会教育法第１３条に則り、２頁から４頁で関係資料を作っております。とりわけ生涯学習課が所掌しておりますのは２頁の１～９番、４頁の２２番の事業です。額的には、今年度と同額となっております。
［子ども・青少年局］
３頁の NO.１０～２１が、子ども・青少年局の所管になっており、ただ２０番だけが県民会議の事務局経費の部分で若干増額がありますが、残りは、生涯学習課と同様、昨年と同額になっております。

【委員長】
この件につきましては、何か見ていただいて是非ということがございましたら、ここで出していただきたいと思います。

【事務局】
この件につきまして少しだけ補足をさせていただきます。社会教育委員会議で何故審議を行うかということですけれども、県も国から補助金をもらっておりますし、県からいろいろな団体に補助金を出すということがあります。通例補助金事業は、福祉・土木事業でも様々やっております。特に、社会教育に関しては、社会教育法上に基づきまして、お手元の＜資料１＞の１頁に書かれているとおり、社会教育委員会議ないしは、その類似する会議で審議してもらうということが言われております。何故かというと、社会教育団体に関する補助金は、以前に比べ随分と額は減ってはきていますが、昔は高額で、行政が勝手な差配で補助しないように、一応チェックをかけるという意味合いで、第三者の中立的な団体である社会教育委員会議で委員

の方々から意見を聞くというようなことを法律上求めております。そのようなことが、法律自体が昭和２０余年からできているものです。昔と大分規模は違うのですが、何回かの社会教育法の完成の中でも条文は削除されずにしっかりと残っていることになります。今回、適正手続きという観点からお計りをしています。

【委員】
何故定額で行くのか。具体的に補助金の額は、予算が変わっていないのに定額なのか。あるいは、県の予算がだんだん少なくなっていく中での定額なのか。社会教育団体が増えていく中での定額なのかということの説明をしてもらいますか。

【子ども・青少年局】
補助率と言いますと通常、３分の１とか、２分の１とかいわゆる県から事業団に対して、何分の何という事業費全体で按分するものです。そういったものではなくて、額として補助金を出す場合に定額となっております。例えば、額が１７０万円である。その額が定額であると理解していただきたいと思います。

【委員】
もっと根本的なことですが、ここの支給される団体というのはずっと一緒なのですか。新規の申請とかはないのですか。また、審査はあるのでしょうか。

【事務局】
ここにあげております団体は、社会教育関係団体・機関等でございます。社会教育関係団体というところに限定した補助金ということであげておりまして、増えたり減ったりということはありましても、大枠団体さんには、補助金を出しております。

【委員】
既存の所に出されるのは別に良いんですけれども、新規の申請とかは無いのですか。

【子ども・青少年局】
生涯学習課サイドでの話は分からないのですけれども、基本的にこういう補助金については、委員さんが言われましたとおり、新規の団体が入る可能性があるかと思います。そういった部分で、今県財政が厳しい折、当然財政課等のチェックを受けながら、最終執行するという形になります。ただ、その前段階として県予算全体として補助金額が増えますのでその団体に対して、補助金を出すことが妥当かどうかを検討させていただきます。今回の額もずっと固まったものではなく、逆に言えば、団体が合併などで変更される場合もあります。

【事務局】
ご質問に関してですが、今まさに平成２３年度の予算として、議会にかけてお計りしていますが、予算案の段階でご説明しますと、社会教育予算全体が減少している中、お手元の資料で前年度と同額ということで、何とか確保しております。これは、全て法律上に基づいて行われる補助ではなくて、県の差配として付けているものです。法律上あるいは条例上の裏付けがあるものではないので、県の予算や財政に基づき毎年、県民の皆さんに説明ができるような形で補助金の措置が今後も続いていくものです。

【委員長】
ここで補助金交付に係わる項目については終わらせていただきます。

（２）「園・学校を拠点とした地域連携の取組」調査について

【委員長】
それでは、議事（２）に入りたいと思います。今回、２年間で４回ということで、本日が２回目ですが、初回との間、事務局から委員の皆様への面談等も含めて、アンケート等もしていただいた訳です。
先ずは、今日の会議では、アンケート結果が一番の土台になっている訳で、それについて事務局から説明をお願い致します。

【事務局】

お手元の＜資料２＞ですが、１回目の会議の時には、テーマの「園・学校を拠点とした地域連携による生涯学習の環境づくりについて」で、学校に負担をかけるのではないか、また、地域から学校へはなかなかハードルが高いのではないかというご意見をいただいておりました。基本的な考え方の一つ目は、住民相互が互いに支え合い、絆をしっかりと深めていくというようなことで、昨年度の提言内容も加味しながら今年度も進める必要があること。二つ目は、園・学校を核として学校と地域が活性化する取組で、とりわけ、学校を中心にして、地域が元気になる取組や仕組みづくりについて、前回同様今後もご協議いただきたいと思っております。三つ目は、「地域住民の学校運営の参画の促進」です。すなわち、学校、地域から広く様々な人が集まり、地域の学校について熟議をいただく。また、校長が地域へ出向いていただき住民に教育方針等を述べること。次に、「地域力を活かした学校支援」。これは、いままでからやっていてくださる内容で、地域のボランティアの方が学校支援等々をしていただく内容と思います。さらには、「学校力を活かした地域づくり」。これは、地域の活力や文化の創造、学校の資源を活用した地域の活性化あたりの話が出てくるのではないかと思います。園・学校を核として学校と地域を活性化する取組例が県下のいろいろな園・学校から集まるよう、先ずはアンケートをしたいということで取組をさせていただきました。
先ず、アンケートの結果で顕著なものに対しては、さらにヒアリングなどをし、そこで「園・学校を拠点とした取組の地域連携」で成功させるためのノウハウが分かればと思います。今回調べてみましたら、５０年以上、地域の方が出入りしておられる事業もございます。そういう長きに渡って、継続できるのはどういう秘訣があるのかというようなあたりが、ヒアリング等でも出てくればおもしろいのかと思います。ここで得られた結果については、広く県内の園や学校に紹介・啓発をし、ひいては、住民等の学習成果の活用機会の拡充ならびに地域の教育力の活性化に資することができるのではないかと考えております。
調査としてはアンケートともう一つはヒアリングです。取組方法の「①　園・校へのアンケート」ですが、現在これは実施しました。県内園・小・中学校５３３園・校を対象に２月中に実施をしております。質問紙は、支援・応援のグループ・団体に関してと、また園・校からグループや団体への支援依頼、グループや団体から園・校への提案です。要するに、双方向の把握あたりがでてくればおもしろいかと考えて委員の皆様方からもご意見をいただき、質問紙を完成させた訳です。質問紙＜参考資料１＞は、先にメール・ＦＡＸ等で事前にお送りをさせて

いただいております内容で、県下の園・学校に送付させていただいた内容にもなっております。
　次に、６頁目でヒアリングの実施でございます。現在、５３３園・校にアンケートをさせていただきました。その内容について、顕著なものは、もう一度第二次アンケートをするなりして、校数を絞らせていただき、そしてヒアリングをしたいと考えております。聴取内容については、「支援の概要」「支援を実施するに至った経緯」これについては、今回も学校・園には聞けていますが、団体やグループには聞けていませんので、今回聞ければと思っております。三つ目が「地域や学校が抱える問題」。四つ目が「人材特性」。支援を実施するための人材特性。次に「支援者の資格」。そして、「支援者が研修」をしておられるのかという内容。その次に「実施体制、推進体制の仕組み」そして「教育委員会・地域の住民との関わり」「キーマンとなる人の有無」。その他に、今回も費用の面については、県下の学校からも意見がたくさん寄せられておりますが「教材費、報償費、保険費」などの調達。「支援における成果」。今後は、成果というものが課題になってくるのかというふうに思っておりますが、「支援をして変わったこと」「問題点・課題」「支援に対して手本・モデルにしたことは」ということについて、まだ項目しか上げておりませんので、今後、質問紙にして、委員の先生方にはメールやＦＡＸ等を利用してご意見もいただき第二次アンケートを固めていきたいと思います。
　原案では、第二次アンケート結果を基に２０校・園程度を選定し、ヒアリングに行きたいと考えております。そのヒアリングの時、すなわち次回の委員会時、来年の７月頃になるかも分かりませんが、委員の皆様には園・校への視察に出向いていただければと思っております。それで、どういう園・校に絞っていくかということなんですが、今事務局の方では、「特色ある活動をしておられる園・校」を特に考えております。「おやじの会」「○○を支える会」「学校運営協議会」「まちづくり協議会」といった所も学校に入っておられますので、そういう観点で、視察やヒアリングができると良いのかと思っております。
　もう一つ、今回、「園・校」や「グループ・団体」以外で間に入ってコーディネーターをされる方がおられると回答のあった園・学校におきましても実際にヒアリング等をさしていただいても良いのではないかと思っております。
　調査等の時期と調査内容のとりまとめについては、６頁の下ですが、ＰＴＡ、地域住民、企業、団体・ＮＰＯ関係者が学校への関心と理解を深め、連携ができ、各学校における体制整備と支援者ネットワークが広がるシステムづくりについてペーパーでまとめていきたいと思っております。また、学校や社会教育施設の地域との連携やまちづくり機能、ならびに連携を進めるためのコーディネートシステムの機能充実について実践例を踏まえて記述をし、次期の「滋賀県教育振興基本計画」の策定の参考になればと考えております。

【委員長】
　＜資料２＞のこれまでの内容とこれからの内容、特にヒアリングの部分と一次調査で得られた結果を基に、ここはおもしろいな、ここは参考になるなという所に、実際に見せていただく中からこれからのヒントになればと思います。
　特に６頁の方ですが、皆さんにご意見をいただきたいのは、ヒアリングを行う上でのヒアリング内容です。事務局の方からあげていただいております以外に、聞いておいた方が良いのではないかとか、こういう視点も大切ではないかということで、皆さんにお気づきがありましたら、是非出していただきたいと思います。三つばかりの基準を上げていただいておりますが、新たに何か基準というものを入れた方が良いのかなど、先ずは６頁の内容をもう少し整理して

いただきたいと思います。
事務局で支援者の資格とありますが、どういうものをイメージしておられるのでしょうか。

【事務局】
例えば、特別支援に係わって、子ども達への認識等々があるのか。実際に支援していただく時に、資格をお持ちの方が係わっておられるのかなど、研修もこのことに係わってくる内容だと思います。

【委員長】
保育士さんということですか。

【事務局】
あくまで例ですけれども、特別支援に係わって、資格をお持ちであるとか、支援をする前に市町で研修をしておられるか、また改めてされているのか、というあたりも見えてくるとおもしろいのかと思います。

【委員長】
そういうイメージです。他に何か、ご意見やご質問がありましたらお願いします。如何でしょうか。だいたいこういう感じで良いかということでしょうか。

【委員】

アンケートを作るにあたってメールでいくつかご指摘をさせていただき、修正していただいたのですが、先ず＜問１＞の問題について、「貴園・校の支援のために保護者・地域・住民等が学校のために自主的に組織したグループや団体はありますか」という問いでは、「ない」と答えたらそれで終わってしまいます。私たちは、学校のために組織したグループでは無いけれども、学校のために活動したいと思っているような場合は、そのアンケートで落とされてこれで終わりとなってしまいます。ある人から中学校の校長先生は忙しくてそこまでは答えないだろうと言われたので、どうしたら答えていただけるのかと一生懸命に考えていたのですが、やはり結果を見たら、小学校よりも中学校の方が、地域に団体が「ない」と答えられており、寂しい結果だったなという思いを一つしました。
もう一つは、ヒアリングですが、＜資料２＞の６頁で調査対象園・校として、「特色ある活動」をしておられる園・校へのヒアリング調査というのは、よく一般的にされているのですけれども、本当に地域に根ざしてやろうと思ったら、出来ている学校じゃなくて、出来ていない学校にどうしてできないかということを、ヒアリングする必要があるのではないかと思うのです。こんなに良いものありますよ、あんなに良いものがありまよと提示をされて、良いとは思うけれども、実際にやろうと思ってもできないのでやらずに終わってしまったら、何の意味もない。だから反対に、予算が足りないのか、人が足りないのか、情報提供が足りないのか。何が足りないから手が出せないのかということが出てくるような調査の仕方が望ましいのではないかと感じました。

【委員長】
これも今後の検討課題として残しておきましょう。

【委員】
　私は、今のご意見と同感です。最初の質問の所を「ない」で終わるのは、おかしいのではないかということで提案させていただきました。「ない」という所を、しっかり聞く方が良いのではないかと思います。立派なことをやっておられ、「特色ある」学校や園を見ていくのも良いのですけれども、「ない」と言われているところにどうしてつないでいくかということまで、結論づけていければと思います。

【委員長】
　このアンケートを作るにあたって、事務局は最初、細かなところまで聞けるようなアンケート案でしたが、年度末で回答する学校の負担もあり、結局、簡易的なものになってしまいました。確かに「ない」という回答が、なぜ「ない」のか非常に大切なことだと思いますが、議論をする中で、課題として考えながらこの調査を継続的にもう少し掘り下げていき、今後のまとめ方を考えてみたいと考えております。

【委員】
　事務局からは、グループ・団体は、二人以上ということでした。最初のきっかけというのは、個人の方が学校で何かをしたいというきっかけから始まって、そこから何かが始まる。私ひとりでは何だから、仲間を呼んで来るよというようなことで始まることもあると思います。そういう個々の一人ひとり、グループや団体でない、最初のきっかけみたいのが拾えませんかということを聞いたら、それをやり出したら収拾がつかなくなってしまうという返事をいただきました。皆さんの話を聞いていて、ボランティアの方が、校長先生と地域の人の世間話で始まったりすることもあるのではないか。そういうことを大事に拾っていくことも大切だと改めて考えてしまいました。事務局の方には、「はい」分かりましたとメールを書いたのですが、少し蒸し返して申し訳なく思います。学校対個という点を大事に拾う必要があるのかと思います。

【委員】
　事務局から来ていただいた時に同じ事をお伝えしたのですが、アンケートとは落とし込みですので、提案的なものはできないか。また、学校とかでなく、自治会などにお願いして、県では、こういうことを考えているから、何かないか。コンペ的に上げていただいて審議することはできないかという意見を申し述べさせていただきました。今回はとりあえず、アンケートを先ずやってからということでしたが、個人ベースになるとなかなか大変かもしれませんので、それぞれ自治会とか住民組織など、学校側だけじゃなく、住民さんにどれだけ入っていただくかということだと思います。ましてや、アンケートよりも学校には負担をかけないで、住民側にもそういうことを伝えアナウンスメントし、掘り起こすレベルでのことはできないのでしょうか。

【委員】
　私も委員でアンケートに回答をするという立場から、アンケート内容を確認していった訳です。地域のいろいろな特技を持っておられる方とか、学校を支えていただいている方、できるだけ日頃つながりを持ちながらやはり個人の方で、きっかけは些細なことからスタートし、それではこんなこともしていただけるのかなど、こちらから呼び水を差し伸べることもあります。学校の活動を実際に見に来ていただいて、先生こんなこともできますよとか、例えば、クラブの支援とかなどです。先般も「しがの教師塾」というのがございまして大学生で、教師になるというしがの教師塾の学生が３名来ておりまして、１０日間、学生が体験のようなことをしてくれました。また、教師塾に入っていない学生が大学が京都なんですけれども、ボランティアをしたいという提案もありました。そういう学生さんといろいろな活動をしていただく中で、次の年に、学校のクラブのサポーターになってもらえるかということで、何か些細なことがき

っかけとなって広がっていくことだと思います。先程お話しがありましたように団体、それぞれの自治会もそうなのですが、何か学校支援できることがないですかというアンケートを取ると更に共通した部分で両者の接点みたいなものが見えてくるんではないかと思います。特色ある活動をされている団体はすでに、確かに学校もそうなんですが、紹介もしていただいていますので、中にはＨＰなどで、紹介していただいてますのでもっと困っておられる学校や地域、さらにこういう活動をしたいという所に何かヒアリングをされる方が今回の趣旨にあうのではないかと思いました。

【委員長】
できていないという部分からですと、個人から少数内容がきっかけとなって実施するに至った経緯とか、また、もしかしたら団体でも個人一人から始まって、同じような思いを持った仲間が集まってできたのですよというようなものもあると思います。そういった聞き方で、多少なりとも掘り下げられる可能性があるのかもしれません。聞く時に、経緯の中でそういったグループやもう一つ前の段階から意識したインタビューやヒアリングの仕方を考えてみると、このあたりがクリアーにできるのかと思います。どうしても今回は、学校・園を中心にやっておりますので、全部が全部限られた予算の中でできるわけではありませんので、そのあたりを考えてみたいと思います。
もう一つは、本当はできていない学校です。余裕があると、「特色がない学校」が分かるわけですが、どこができていないのかということをヒアリングで、なんであんたの学校ができていないのかと尋ねるのは、あまりにもというふうに思います。できているところに、あなたの学校できているので聞かせてくださいなら良いのでしょうが、その逆はまずいと思います。簡単なアンケートをＡ４の一枚でもかまわないから作って、全部ではなく一部でもできていない理由を聞いてみることは可能かと思います。かなり学校数も多いですから、２０でも３０でもかまわないので、ピックアップして、調査することは委員の意見が多いので、それらの課題に対し我々も話し易いと思います。

【事務局】
委員の皆様の意見を聞かせていただいて、「できないのは何で」と聞くことは、重要な課題であると改めて思っております。そもそもこのアンケートの目的が基本なのですが、そこをいろいろと考えていたのですけれども、先ずは、良き参考になる取組を調べることが筋じゃないかというようなことで、このアンケートは設計をしました。それで、先程も話がありましたように、Ａ４で６～８枚も大量なものをアンケートとして押しつけられたら学校は悲鳴を上げてしまうということがありましたので、できるだけ項目は精選して詳細なところはヒアリングの方で聞いていこうとしました。先ずは、スクリーニングをしようということで、この項目については厳選をさせていただきました。痒いところには手が届いていないということで、そういう細かい所はヒアリングで聞くということの考えで、少し荒いアンケートになっております。
お話の中でありました、できていないのは何でだというのは、出来ていない所に、なんでできていないんだと言って押しかけられるとかなりの不満が予想されます。それは出来る限りしたくないと思っております。何でできていないんだということが、課題解決の第一歩でもありますので、ヒアリングにとらわれず知恵を出しながら大々的に聞くのではなくて、一緒に課題を解決するためにお知恵を貸してくださいというような話になるのではないかと思います。お金の話というよりは、マンパワーの話になりますが、いずれにせよそういった声が少しでも反

映できるような形で工夫をしたいと考えております。

【委員】

話の中で、何でできないのかではなく、反対にどうしたらできるのかという視点だと思うのです。何でできないのかと言われると、学校は一生懸命にやっておられるのに、何か批判されることになってしまうので、今は、私はモデル校が必要であると思います。モデルがこういうことで出来ていて、今からされようと思っておられるところが参考になればと思います。できない理由が、資金なのか、マンパワーなのか、繋がらないのは意欲なのかというところが分かり、反対にどういうふうに私たちが次に支援をしていけば良いのかということも分かると思っております。そのモデルが、一人から広がりましたとか、おっしゃっておられる自治会から始まりましたからなどアンケート調査でも良いかなと思いました。

【委員長】
今回の調査を、良い例から学ぶべき事はたくさんある訳で、その一方でもう少し一歩踏み込んでやろうと持ったら、良いところばかりではなく、出来ていない部分からも必要だと思います。

【委員】
学校でアンケートを書いた側なんですけれども、中学校におりました時には、個人で学校に来ていただく方はたくさんおられるのですが、小学校区が２つ３つあるので、小学校区単位のグループが自然に学校の方に来て、例えば、環境グループであるとか、読書もそうですし、地元でサークルをされておられる方もそうですし、そういうグループが、学区ごとにあるという部分から、小学校でできても、中学校の方では、グループで学校に入るということのチャンスが少ないのかなと思います。学校側からみると、割と保護者のＰＴＡとして学校に来られているその層とその一寸向こうにある青少年学区民会議とか子ども会など、子ども向けのいろんなことを地域の活動としておられるグループとさらにもう少し向こうにそれぞれ自分の趣味でやっておられるサークルグループとに分けられ、小学校では、そこら辺までは手が届くのですが、中学校では小学校と保護者は同じなのですが、保護者も幅が広く、学校に来られるということから言うと同じです。次にどういう所に手が伸ばせるかというと、今回回答を頂いた中で、やはり良い例というものが見つかって行くのではないかと思います。例えば、保護者の中でも、学校への支援をどんどんＰＴＡ活動のみではなくて、そこを中心にしながら発展されて行くところもたくさんおられるので、「おやじの会」などもそうだと思います。そういうものがどういう距離の部分でできあがってきているのか、本当にもっと違う成り立ちみたいなところはないのかという所から見ていくと、新たな発見や関わりの中で、分析する中で、見えてくるんではないのかというふうに感じております。

【委員】
今の小学校云々という話でしたが、さっき自治会にと言ったのは、基本的に小学校の所というのは、近くで同じところの地域に住んでいる人が割と集まりやすい状況にあります。けれども、中学・高校と上に行くにしたがって、だんだん校区も広がっていきますし、そして保護者も基本的に自分が勤めに行っている職場というコミュニティの中で普段話しやすい環境の中にいるので、なかなか学校とは逆に、学校がこういうことを求めていますよというのを住民側に

出していかないと、取組自体が知られないし、自分から入って行こうとする接点がなかなかない。「学校を中心とした」となると、地域ということになってくるので、自治会というものを通じてアナウンスメントをしていかないと、アンケート以前の問題として、こういう取組をしていますよということを、もっと自治会を使っていかないと、なかなか保護者のグループを作るという所に居たらないんじゃないかと思います。結局のところは、低学年の保護者の方とか、ある程度リタイアされた年配の方々とか、地域におられる方のグループが多くなってしまう。だから、結局それを大きくしてしまおうと思うと、働き盛りの年代の方にどれだけ関心を持ってもらうかが大事だと思います。その意味で、このようなことをやってますよというアナウンスが大事になってくるように思うのです。

【委員長】
今後、こういう活動を広げていく、根付かせていくという意味での推進方策の一つとして、情報提供が大切です。知らなきゃ意味がない。おっしゃるとおり、アナウンスメント、こういう活動を地域住民に広げていくかということが、これからの大事な課題ということになると思います。また、そのあたりのことは、後半、最後のまとめのところで、当然議論をしていき、また情報提供の方法的なものがあったら、皆さん教えていただきたいと思います。

【事務局】
今ほど、アナウンスメントと言うことをいただきまして、小学校区のことであれば、保護者にとって手の届き取り組みやすい範囲、中学校区になればなかなか地域的にも拡散するのでということがありました。それと微妙なところではありますが、保護者の現役の方々に、学校についてご理解をいただき、あやよくばお手伝いいただきたいということで、そのためのＰＴＡの組織や、そして既存の地道な活動をされているのですけれども、何分にも子育て世代で経済に貢献していただき、要は親御さん世代は、なかなか学校に来ていただきたいということが難しいと正直思っております。そのため、県として保護者の方々に参画してもらいたいということを思っておりまして、企業の方々と連携して、「しがふぁみ」と私たちは呼んでいるのですけれども、家庭教育に対して協力していただくような企業と協賛をいただくというような協定を結んでおり、展開をしております。だいぶんと、実績自体は増えて来たわけでごすが、次の展開を考えなければならないという段階に入ってきております。やはり何よりも保護者の方々にできるだけ参加していただきたいと思っております。社会全体の宝であると共に、先ずは自分の子どもでありますので、そう言った観点からもお子さんをしっかりと見る機会を作りたいというふうに思っております。そういうところは、企業さんとも一緒になって、お互いハッピイになるような施策も考えていきたいと思っております。

【委員長】
それでは、調査の結果について、事務局さん宜しくお願い致します。

【事務局】
＜資料３－１＞のアンケートの部分についてですが、ご説明をさせていただきます。
先程の意見にもありました、「保護者や地域住民等が自主的に組織したグループや団体がありますか」ということでお答えをいただきました。５３３園・校を対象に、調査期間は２月８日～２月１８日までで、回収については、ＦＡＸでさせてもらいました。また、回答が「ない」

という所には、ＦＡＸに加え電話・メールででも回答をいただいております。集計については、県の事務局で執り行っております。
　８頁の方になります。調査項目につきましては、「問１～７」の内容になっております。本日までに調査項目のアンケート用紙につきましては、先に送付済みですのでご覧頂いておると思いますが、「問１～７」に分けさせていただいております。「調査結果の運用」については、先程ご意見をいただきましたので、もう一度事務局の方で考えさせていただきまして、また、委員の皆様にはお計りをさせていただきたいと思います。アンケートを作るにあたって、委員の皆様方には何回かご意見を頂戴いたしました。ありがとうございました。

【委員長】
　アンケートについては、この中身についてご報告いただきながら、具体的に皆さんのご感想・ご意見をお願いしたいと思います。

【事務局】
　＜参考資料１＞を見ながら、＜資料３－２＞をご覧いただけたらありがたいです。なお、＜参考資料の２～５＞は、それぞれの幼稚園・小学校・中学校の生データになっておりますし、また関係資料を付けていただいた園・学校の資料をまとめさせていただきました。それでは、＜資料３－２＞で説明をさせていただきます。回収率ですが、２月２５日で切らせていただきましたところ、９８．５％の回収率でした。
　「問１の自主的に組織したグループや団体はありますか」という質問に対しては、小学校で７６．５％になっており、中学校では２７．２％であり、大変中学校で低い数字になりました。
　次に、「自主的に組織したグループや団体の中」で「ある」とした団体数は、幼稚園・中学校で平均１．５件前後になっております。小学校では、２．４件となっており、多い団体となると１４団体という回答が得られました。
　次に、②の方で、「自主的に組織したグループや団体」が「ない」場合の理由では、一つ目の「地域に団体がない」と、三つ目の「地域からの提案がないので、今後積極的に支援を求めていく」を、「地域に団体がない」という観点で足してみると約６割となりました。
　次に１０頁の方ですが、「ない理由」で「その他」を選択した回答内容については、「学校支援地域本部という組織がある」「ＰＴＡで対応している」また、「既設の団体がある」「個人が対応している」「その他で検討中である」が入っていただくのにその両立が非常に難しいという回答がございました。
　続いて、問２の「主たる団体やグループの数と平均構成人数」ですが、幼稚園で１２６団体をあげていただきました。小学校では４３８団体であり、中学校では４５団体です。それぞれの構成人数の平均ですが、幼稚園で１３．２人、小学校で４０．９人、中学校で３５．６人となっておりました。小学校・中学校の様子を見てみますと、お帰り立ち番などで沢山の方にお世話になっておりまして、特に中学校では、「あいさつ通り」推進友の会で1,０００名の会員がおられる中学校がありました。これは、中学生が通る路上で、朝は「おはよう」、帰りは「お帰り」」と言ったりするなどの活動をしていただいているということで、平均人数が上がってきているのかと思います。

【委員長】
　内容が多いので、小分けにして説明をしていただきます。学校のために、保護者・住民が自主的に立ち上げられたグループや団体で、ご質問がありましたらお願いします。

【委員】
　「問１」についてですが、自分の経験では、子どもが幼稚園に入った時には、「読み聞かせグループ」を立ち上げたのですが、自分の子どもの出身幼稚園を見たら自分たちが立ち上げた団体が当時のまま書いてありましたので、他園でも入園と同時に立ち上げられたケースが多いのではないのかという印象を持ちました。小学校の場合は、自分の子どもが行っている学校を

見てみると、学校の行き帰りが大変危ないので、保護者でなんとかして欲しいと学校に言われ、仕方なく子ども会や自治会の組織で、登下校の見守りグループを半強制的に作り継続しています。中学校では、あまり言われませんでしたのでできませんでした。

【委員長】
それでは、「問３・４」まで説明を願います。

【事務局】
「問３・４」について説明します。「問３の（１）」で支援・応援いただいている内容ですが、ご指摘いただいた内容では、幼稚園では「読み聞かせ・読書活動支援」が多く、だいたい「読み聞かせ・読書活動支援」が 50 ％で、「行事等の運営管理」が 30 ％でした。また、11 頁の方ですが、小学校では「読み聞かせ・読書活動支援」が 38.4 ％で、「登下園・校の子どもの安全確保」が 31.5 ％、「図書館整備」が 16.0 ％ということで、「読み聞かせ」と「登下校の安全確保」が中心でした。中学校の方では、「生活・学習支援」として授業の中に入って頂いて指導していただくというのが 22.2 ％、「園・校内整備」が 20 ％、「読み聞かせ・読書活動支援」が 17.8 ％という結果でした。
特色ある取組内容を、『施設メンテナー型』『環境サポーター型』『ゲストティチャー型』『学習アシスタント型』の４タイプで分けました。12 頁は校・園が記述したものを、４タイプのカテゴリーに分けました。例えば、『施設メンテナー型』は、幼稚園の施設管理「園庭樹木の葉刈り」「除草」「啓発紙の発行」「壁面飾り」とかハード面に係わることが、『環境サポーター型』では、花生けとか絵本の整備、そして図書館の整備が、『ゲストティチャー型』として、子ども達に人形劇を直接見せる、コーラスを指導する、指人形をするというように、指導を中心になっていただく方の分類になります。次には、『学習アシスタント型』で主は学校がイニシアティブを取られます。その中で、提案をされて活動をしておられるという形で分類をしています。この分類別に大別し、カウントしたものが 11 頁の下になります。
幼稚園では『学習アシスタント型』が非常に多く、「読み聞かせ」の部分で、園の先生が中心になって読み聞かせをされるという回答が多くありました。小学校では、『環境サポーター型』では、安心・安全立ち番が、『学習アシスタント型』では読み聞かせの部分がそこに入ってくるのかというふうに思います。中学校では、『学習アシスタント型』で授業の中でサポーターが入って学習指導をしたり、生活指導をしたり、立ち歩きの子どもの指導をするといったような回答が 42.2 ％ありました。
12 頁の下ですが、「どれぐらいの頻度で活動はされておられますか？」では、毎日というのはお帰り立ち番のようなものが入っています。年に２～３回とか学期に数回などという回答が割と多いです。「不定」と書いているのは、「不定期」ということで、活動はまちまちであるとする回答が 50 ％前後を占めております。
そして、13 頁の「活動経費の調達」ですが、グラフの右の活動経費のお金の有無では、小学校ではお金の調達が厳しく、中学校では 50 ％弱でお金はあるとしました。県では、会議の度に、公立小中高等学校に対して助成制度があります。「学校生き生き活動支援事業助成金」では、謝金・実習費または、傷害保険の部分について、最高３万円まで助成ができます。そして、１支援、一人までは上限１万円までの助成が可能ですという案内をさせていただいております。こういうものをうまく使っておられる方は、国または町や市でも使っているとされています。次に、ＰＴＡからの持ち出しや団体さんにお願いをするとかになっています。
保険についてですが、以前は安全・安心立ち番に関して、県で保険の支払いをしていましたが、現在は、市町の責任で保険を付けています。小学校の 46.1 ％の回答はこの結果です。それ以外の内容では保険が出ていません。今回はまだ速報の段階ですので、今のデータまでですとそこまでしか読み取れないです。

【委員長】
「問３」で具体的な内容で幼・小・中に分けて見ていただきました。支援の内容、活動計画

でお気づきの点あるいは感想がございましたらお聞かせいただきましたらと思います。また、結果から滋賀県の学校支援の特徴について、如何でしょうか。

【委員】

２０年間ぐらいボランティアを続けてきて、結果より学校は変わったと思いました。以前、２０年前、自主的にボランティアをさせてくださいと言った時は、すごく取り上げていただいて、東京まで連れて行っていただき、発表までさせていただいた。今は、学校が開けてきており、いろんな課題をお父さんお母さんが自分たちで見つけ成長しておられる様子が、手に取るように分かりました。しかし、新しいジャンルになると学校が非常に退き、怖がることが有るように思います。一昔前、学校に私たちがお手伝いをしたいということを言ったことがあるんです。話をしたのですが、それは結構ですと校長先生から言われたこともあった。中学校に関しては、支援活動とか学習支援とかがたくさんあるのだと思いました。中学校は、本当にしんどいし、いろんな事をしないといけませんし、入試という大きなこともありますし、そういう中、学習支援をしていただいてくださるのは、本当にうれしいことだと思いました。アンケートについてですが、簡潔で良いと思いました。活動経費については、長く続けていく上で、そういうグループが立ち上がっても究極、活動の経費があるかないかの問題は大きいです。情報をもっともっと学校側にも提供していただいて、長く細く少しでも地域の方がやっていっていただけることを、私は節に求めます。

【委員】

大阪から来ましたが、滋賀県の特徴ですが、４パターンに分けられたのは良いと思いました。特に、サポートを○○型と分けておられるのは、分かりやすいと思いました。その中で滋賀県ということが、「しめ縄づくり」とか「地域に根ざした物」、中学校のゲストティーチャーとか「啓発講座」とか「部落解放に向けての講演」とか「米作り」もそうですし、「創立者について学ぶ講演会」、「琵琶湖の環境問題」、「ビオトープの管理」とかを含めて、なかなか特徴的なものがあると思いました。こういうことからしますと、プラス面から攻めるのかそれともマイナス面から攻めるのかという話が出ていますが、具体的なモデルとして、これだけはできるかなということで、モデルはモデルということで攻めるのが大変有効であると思いました。

【委員長】

全国調査では、部活動やクラブ活動の支援・指導が非常に多く出てくる。本県では、クラブ活動の指導者に少なさを感じました。逆に、読み聞かせや読書活動支援が非常に滋賀県の図書館に根付いており、幼稚園・小学校・中学校を中心に大きく学校支援ボランティアが根付いていることが非常に目立ちます

【委員】

それに関して感じることは、スタートはいろいろあり、読み聞かせについては、保護者の側の提案であれ、学校側の提案であれ、非常に沢山入っておられることはうれしいし、中身も充実しているということなので、それぞれ町になるのか市になるのか分からないけれども、公立図書館等の支援とか専門性の提供とか、非常に長続きをしていると思います。保護者の方もただ自分が持っていることを出すだけでなく、学ぶ場があって、自分たちも生涯学習としての充実感を持たせながら学校や子どもたちに提供していることが、長続きをしていくための充実や大きな基盤になっていくと感じます。

【委員】
学校支援の活動支援タイプ別の内容を見てみると、学校での「スキーの指導」とか「ミシンの補助」とかは、私の地域では親向けに個人的に募集をされています。これはアンケートからいうと団体でされている活動ですか。団体であればどういう団体になっているのでしょうか。こういう項目だったら、どの学校も個人や保護者向けに発信されていることで、例えば地域の人に昔の遊びを教えてもらうとかだったら、普通にされているような印象を子どもの学校からは受けています。自分の子どもの学校を見ていたら、そういうことがアンケートからでは出てきていませんが、それだけたくさんやっているにもかかわらず、出てきていないのは、個人の活動が何か大きく見落とされるような印象を受けました。

【委員長】
今回のひとつの限界の逆限界ですね。言わば氷山の一角で、その水面下にもっと個人の活動があるということを考えれば、ものすごく魅力あるものだと思います。これからの可能性を感じる活動でもあるという見方もあり、確かに学校が募集を出して、募集に対して個人が受けるパターンがあります。残念ながら、今回でのアンケートでは、なかなか見えてこないこともあるのですが、足りない部分を委員の皆さんのご経験で、補足をしながらこれからの方向性や在り方ということをまとめていただけたら、それが一番良いというふうに思います。

【委員】
この調査自体は、学校・園に対して、それぞれの園・学校でやっておられるボランティアに対して全部聞いているような感じをしています。実は、社会教育委員会、生涯学習課がやっているということから、学校支援と地域づくりをどうつなげるかという観点でやらないといけないと思います。学校がこんな希望があるというのと同時に、支援するのが個人であっても良いと思います。当然それだけでも学校支援ボランティアを出して欲しいとの要望が来るのですが、直接は地域おこしに繋がらないと思います。また、個人で学校支援をやっている園・学校としたらその個人での活動を、どう地域づくりに生かしていくのかという話を聞かないといけないと思います。園や学校を良くするためのアンケートじゃないと思いますので、そこら辺をどう線引きし焦点化するのかをはっきりしていかないと、折角の良いアンケートが学校教育課のようなアンケートになってしまいがちだと危惧しました。

【委員長】
そこらをヒアリングで補っていくべきでしょう。ヒアリングの中で個人の学校としての対応をしっかりと聞いていけば、団体としての活動と、一部ではありますがその学校で活動した個人に呼びかけて集めているボランティアがどうなるのか分かると思います。

【委員】
「ない」と回答されたのが、「ない」中でどう地域づくりに生かしていけるかがキーワードであると思います。やっているところはやっているところで地域づくりにどう生かしておられるのかということを聞いていかなければいけないのかということを思いました。

【委員長】
なかなかアンケートで全部聞くことは無理で、そのあたりは、ヒアリングを聞く時の視点であると思います。

【委員】

先程のボランティアによる指導についてですが、中学校においては部活動の指導というのが非常に難しくなっています。以前、野球部の顧問をやっていました。若くて独身の時は、専門的な指導をやらしていただけるということで、やる方もやる気満々でやってきましたが、現在、中学校の教員の平均年齢が４５歳前後で、本校も職員が２５～２６人いますが、２０代が１人、３０代が少しで、あとは４０～５０代です。現在１０ほどの部活がありますが、誰かが顧問にならなければならない。事故の問題や賠償責任などが追求されますので、各部活動に2名ずつ付き、練習試合に連れて行くときのために、最低2人は必要です。５５歳を越えたような職員に、どちらが主・副とはしておりませんが、協力してお願いをしています。年齢の方になりますと当然体力的なこともあるし、お家ではお年寄りの介護をしなくてはならないとかあり、我々管理職が、何とか頼むと言ってお願いする。ある部の顧問で５０半ばで家のことも、地域のこともしないといけない。学校では教務主任に就いており、なかなか放課後も練習に出て行けない。保護者からは一生懸命にやっている部活とそうでないところもあり、苦情に近いことを言われる。学校評価でも部活動のことが多くのウェイトを占めている状況にあります。地域に指導ができる方がおられるので教員が放課後忙しく仕事をしておられる時は、学校に先生がおられるので、その間に行って、練習に行ってやろうという個人的な話からお願いをしているケースがあります。部活動は学校では、学校で生徒指導も含めていろんな人間教育ということでやっておりますが、外部の指導者で勝つことが第一だという方が学校現場に入って来ておられると、なかなか学校の方針とその方の方針とが合わない。そうすると、いろいろとトラブルが出てくるということで、そこら辺は十分に話をしたことがあります。今、中学校での部活動の指導というのは、土曜・日曜に職員に練習に出ろと管理職は言えませんので、その辺が難しいことなのです。結構、若い者でも割り切って、私は土曜・日曜は自分のことをしたいのでと言われたら、それ以上のことは言えません。実際にそのような学校の方針も理解していただいて、指導に入っていただくことを、本校に限らずどこの中学校でもそういう悩みを持っております。

もう一つ、小学校と中学校で生活学習支援というのは、割合小学校で非常に少なくて、中学校で多いということですが、『学習アシスタント型』ということで、子どもたちの学習を効率よく進めるために、教師の指導を手助けするということだとは思いますが、おそらく中学校では、学校が荒れているために、例えば子ども達が授業に入らずに授業中も廊下を歩いているとかであると思います。

学校としては、一番支援をいただきたいのは、いわゆる不登校傾向と特別支援です。学校には来ているけれども、コミュニケーションが十分ではなく、普通学級に居れば勉強できないということで、別の部屋で学校生活をする生徒がいます。また、特別支援を必要とする生徒です。本来は就学指導委員会等で情緒学級等で学習する方が効果があるのですが、本人あるいは保護者の考え方で普通学級で学習する生徒もいます。現在も職員の定数の関係で、授業はそういう生徒も含めて教師は１人で、いわゆる一斉指導です。そこでそういう生徒が、各学級に１～２人いる訳ですね。実際、そういう支援を地域の人に来ていただいても、専門性がありますので無理だと思うのです。現場としては、そのような支援が一番困っていることなんです。先程も

言いましたように、部活動とかあるいは、学校全体が落ち着かなくって学校が困っていることを地域の人に頼むのは難しいと思うのです。残念ながらその辺の現状はアンケートには出ていないと思います。

【委員長】

普通と比べると、生活・学習指導が小学校より中学校では減るんですけれども、そこらあたりの原因を学校にも聞いてみたいと思います。次に、「問４・５」についてお願いします。

【事務局】

１３頁の下です。「支援を受けている概ねの年数です。」どの校種・学年でも平均では５年以上になっておりますが、短いところでは、まだ緒について半年というところもありました。長い所では５０年。教育後援会。どこの学校でもあるんですが、そういう団体が主体となって活動しておられる。また、地域文化継承として、地域で江州音頭をしておられる。人権学習をやっておられるところもあり、３０年以上という所もありました。

続いて、１４頁ですが、「グループや団体が立ち上がったきっかけや理由について」です。記載された文章で読み取っていったのですが、自発的に、立ち上がったというのが殆どです。学校や市・園からお願いがあったというところが何％かはありました。また、ＰＴＡの会長または、役職におられた方が組織されたというケース。学校等に出入りのあった団体等がそのまま立ち上がっていったというケースもありました。細かな自由記述については、そこに記載をしています。

（3）「園・校からそれぞれのグループや団体に支援をお願いすること、または逆にグループや団体から支援の提案を受けること。」は、どれだけありますかということですが、まず、園・校からグループや団体へ支援をするのは、そこにあげてあります数です。しかし、(　　)で記載されているものは、一方向のみでの回答であり、幼稚園では４９、小学校では１３５、中学校では１９です。そして、２段目、グループや団体から園・校へ提案をされるのはどれくらいあるかということで、提案をされているのですが、学校側が受け入れないというのが、幼稚園では１６、小学校では２９、そして中学校では２という回答となっております。一方、双方向で互いに良好な関係ですという数字が、一番下の数字になっております。

次に１５頁です。「園・校がｸﾞﾙｰﾌﾟ・団体と意見交換をすることの有無」についてですが、殆どの校種で「ある」と答えております。その「意見交換をする頻度について」は、年間数回とし、定期的である、また不定期である「その他」では、ノートを使って連絡をしているとのことで、実際に相談や会話をするだけの時間がないということでした。また、来園・来校された時に、少ししゃべっただけで打合せを終わってしまうというような回答がございました。

次に１５頁の下になります。問５「支援や提案を調整しておられる方（園・学校グループや支援グループ・団体以外で両者に入って）の有無とその人の立場と如何です」。学校、団体以外で間に入っていただける方がおられるかということですが、その右側の数字を見ていただいても分かりますように、幼稚園で１８％、中学校で２９％、小学校は１０％を切れております。殆ど調整役がおられないということです

次、１６頁です。問「その調整役をしてもらえる方は、どういう方ですか。」では、学校以外ということで考えておりましたが、それでも学校の管理職がやっているとか学校の職員がやっているという回答もありました。あと、町づくり協議会とか地域コーディネーター、学校運営協議会の人に係わってもらっているということが、小学校で１１人、あと地域住民がやっているのが７人、役所の職員、例えば公民館の職員であり、生涯学習課の職員、まちのことをよ

く分かっておられる方がやっておられるなど、そこに記載した数字での回答がありました。
次に１６頁の真ん中の回答のグラフなんですが、その方への謝金です。ほとんどが「なし」という回答が７０％強である回答がありました。「ある」場合は、資金元については、国とか県または市町の補助金等々を使うという形でした。あと、学校が出しているという回答が少しありました。

【委員長】
「問４・５」についてご説明をいただいた訳ですけれども、何かご感想・ご意見・ご質問についてございますでしょうか。

【委員】
私の学校は、甲賀市の大原、旧甲賀町の中にある大原小学校です。私の学校に１１７年続いている「愛林活動」がありまして、山へ行って、植樹をしてそれを育てるという活動なんですけれども、秋には下草を山へ行って刈るのです。ＰＴＡ活動なんですが、先般、先週６年生が祈念植樹を山でやって、そういう活動が脈々と続いています。この活動が続いているということからしますと、先程開会の委員長のご挨拶でありました、「三方よし」です。まさに、木がお金になった時代がありました。その金のなる木と言いますか、木を使って学校を建築するということが脈々と続いてきました。また、ボランティア・地域、そして学校にとっても、メリットがありますし、木を育てるということは人をつくると同時に、そういう環境教育も当然ある訳です。こういう位置づけの中で、１１７年続いている活動なのですが、そういう中でやはり財産である山を持っておられますので、そういう財産が学校の教育活動に支援していただいている。そして、それを子ども達が植樹をして、今、木がお金にならないのですけれども、学校のいろんな教育活動を支えていただいている。それがまた環境教育にも繋がっていく訳ですが、やはりベースになるのは、途切れないで続けていけることが、その学校の特色にもなっていっていると思います。保険とかいろいろな条件など、何かがあった場合は、途切れてしまうということもありますので、そういう援助を受けられるものについては、やはりうまく活用するとか必要です。実は、カフェテリアプランというものがありまして、このカフェテリアプランの中でボランティアをしていただくと最高３万円ですか、１つの団体が来ていただいた場合に、お金も活用できるのです。特に保険です。何かあった時のためにそのボランティアの方に対してせめてもの支援ができるようなシステムなり、市町では経済的に厳しいので、財源になるようなものがあれば、地域づくりにつながっていくような取組に繋がっていくように思います。また、コーディネートをされる方は、校長なり教頭なりが、日頃情報を得ながら地域の方と話をする中で、またコーディネートをやってもらえそうな方を開発していくことが必要だと思いますし、近隣の公民館とか、やはり自治会の方とできるだけ情報交換をしていくことが非常に大事だということを感じました。

【委員長】
非常におもしろいですね。植樹が地域づくりにつながっていくことが。あと、今おっしゃった。小学校でコーディネート役が９．３％。このことは一寸、気になる数字ですね。このあと今後どうしていくかということが必要ではないかと思います。

【委員】
１４頁の２のところの「立ち上がったグループ・団体の内容」ですが、やはり新規に立ち上がったグループというのは、学校でニーズがあるグループであって、幼稚園だったら「読み聞かせ」、小学校だったら「パトロール」、学校が強く求めていることについて新しいグループができるという傾向を強く感じました。また、ボランティアとして学校に入ってきていただいて迷惑な団体もあると思います。例えば、図書関係のボランティアでも、すごく偏った選定をされる場合があったという話も聞いております。安全とか守秘義務など、学校にいろいろな人が入ってきて、個人情報等が外に流れていくことを非常に恐れていることから、誰でも自由に

学校に入ってこられることが、学校現場からしたら難しいのではないかと思います。学校の本音の部分を、やっぱりヒアリングで聞くべきだと思います。また、学校が求めておられることに応えていたら地域興しにならない。私たちが地域に住んでいて、本当にやりたいことがあり、学校に言えば断られる。例えば私たちが、赤ちゃんをだっこする体験を学校の家庭科でやって欲しいとお願いしても、授業時間が少ないとかいうことで、相手にされないです。本当に私たちがやりたいことと、学校が求めておられることとがずれていると思います。学校側は、地域興しのためにこの団体を育ててやろうという所までの余裕があるかといえば、現場からすれば、そんな余裕は全然ないと思います。学校を中心にした地域興しで、学校に迷惑をかけない程度に、学校が核となり、どう地域興しができるのかということを考えていくのが本来の目的であり、学校の便利屋さんをどう組織していくのではないと思います。

【委員長】
１４頁の最後の「双方向」に非常に興味を感じているのですけれども、学校側のニーズに対して地域がどう応えるのではなく、地域が考えて学校でこういうことがしたいというような要望を学校側がどう受け入れていくかという、正に学校のニーズと地域のニーズとをいかにうまく取り入れていくのかという点、すなわち双方向での事例、それも生の声を聞く中で、具体的に地域の声に生かされているのかということが聞ければ、一つの課題の方向性が見えてくるのかと思います。

【委員】
１５頁なんです。問５の「支援や提案を調整されておられる方の有無」についてですが、小学校で殆どないですよね、一番に気になったのがここなんですよね。このコーディネーターをどうやって選ぶのか。次の頁にそれが出ていますね。一番多いのが「学校の管理職」、次に「ＰＴＡの役員」で、三番が「まちづくり、地域コーディネーター、学校運営協議会」になっていますが、これも学校の本音と建前とがあるのではないかと思います。コーディネーターとは、名前の響きは良いのですが、実際学校の中に入ってきてもらって、どのあたりまでコーディネートするのか、それによってはとても迷惑ではないかと思えるんです。そこで、小学校が９０．６％が「なし」で、要らないと言っている訳ですね。そういう状況の中、地域の中におろして行って、地域づくりとどう関係づけるかは、どうかなと思います。また、「見守り隊」が、多くの学校の保護者であったり、ＰＴＡの役員であったり、それから会社を辞められた方、団塊の世代の方が多くおられ、ずっと続いているのですが、相対的に少なくなっていると聞いております。それはどうなのでしょうか。

【委員長】
本当にコーディネートという言葉は良く使いますが、どのように育てどのように運用していくのがどれ程難しいか、いつも課題になります。しかし繋ぎあっていくことが必要なことは、良く分かり、このあたりの現状、数字だけで最終的に判断をすることは難しいことがあります。問題意識として持ちながら、生の声を聞きたいと思います。
次の問６・７をお願いします。

【事務局】
問６ですが、「地域のコーディネートをうまく進めるにはどのような条件整備が必要と思っておられますか。」では、「お金がやはりない」、「コーディネータ－をどういう方にしてもらうか」、「日頃の人間関係をつないでいかないと」という部分での回答が多かったです。
問７です。「現在うまくいっていることは何ですか。」ということで、「子どもの経験、視野・体験・学習が広がる」、「地域の方とコミュニケーションが図れた」、「いろいろな情報交換ができた」、「地域の連携の良さが発揮できた」という回答がありました。
問題点としては、やはり「打合せをするための時間が少ない」、「予算がない」、「ボランティアの方がおられない」。また、小学校あたりでは、お帰り立ち番で立ってもらう方で、急な

インフルエンザ等で子どもを早く下校させたい時に、どのように立ち番の方に伝えて良いのかが分からないというような回答もありました。そして、その他の意見で、先程も委員がおっしゃられたように、「スクールガードの人数」が減ってきており、学校も非常に苦慮しておられる意見も多くありました。

【委員長】
今後の課題で、コーディネートを進めていくことで「うまくいっていること」、「今後どうしていくかということ」について、関連のご質問がございましたらお願いします。
予算措置とコーディネーターの必要性は、みんな悩んでいるのですね。コーディネーターと謝金をどうするんだということ。予算がないという中で、そうなると公民館の職員さんや学校の先生にどうにかコーディネーター役を果たしてもらえるか。その一方で、学校の先生も忙しいし、このお金の問題とコーディネーターの問題はセットで悩んでおられ、非常に大きな課題になっているようです。それぞれの地域性があるんでしょうが、そのあたりがよく出ているんだという気がしています。
特に、コーディネーターのボランティアとしての不足です。こういう活動が広がれば広がる程、逆に人材不足があります。人材を如何に継続的に確保していくかが問題になってきます。そのあたりをどう進めていくかが問題です。

【事務局】
先程のコーディネーターの件ですが、このアンケートの対象から外しております事業に「学校支援地域本部事業」というのがございます。これは、昨年度までは、文部科学省の委託事業でございますが、国費を使った事業です。そちらの事業を実施していただいております学校さんには、地域コーディネーターという人が雇用できましたが、そのコーディネーターさんは少ないです。今回の聞き方は、園・校やグループや団体の人以外で両者の間におられる方についての質問でしたので、おそらく「ない」という回答になったのであると思います。

小学校で「ない」ということの率が高いというご指摘がございましたけれども、これは私の感覚なんですけれども、決して小学校ではコーディネーターさんはいらないよというのではなくって、どうしてもお願いをする方がなかなか見つからないと言いますか、地域のことも良く知っておりながら、そして学校のことにも耳を傾けていただきながら、非常に微妙な立場と言いますか、両方の間に入っていただくということで、いろいろと気を遣っていただくお仕事になるのですが、そういう方を求めておられるのです。決して学校の方で「いらない」と言っているわけではないと思われます。

【委員】
幼稚園の頃は、お母さん方がお家におられ、小学校へ行かれると今は働かれる方も多いので、幼稚園の時は支援をしていても、働きにでることで、なかなか支援ができないことがあるのかと思います。生活がすごく大変になっているので、働きに行く数というのは、みなさん学童に行かせて働きに行くとかあります。私の周りの方々は、やる力もおありの方もおられるのですが、お仕事の関係でできないという方が多いです。

【委員長】
さらに細かく分析すれば出てきそうなんですが、第一印象ということで、とりあえず、滋賀

県での学校支援ボランティアの取組の全体像のようなものが、ぼんやりとご理解いただけたと思います。

ヒアリングですけれども、事務局でプラスαして項目を整理していただけますでしょうか。コーディネートの問題もそうですし、もう少し知っておきたいとか、今日の皆さんのご意見も参考にしてヒアリングの項目を検討していただきたいと思います。その上で、もう一回皆さんのご意見を出していただきながら最終的に一つでも二つでも、学校にも負荷にならず、それが学校にとっても学校を豊かにするものであり、同時に地域にフィードバックされて、地域にもつながっていく。理想かもしれないけれども、少なくてもそういう方向に向けて、今問題になっていることを１つや２つどう解決していけば良いのかヒントみたいなものを考えて、その情報発信をしていけたら良いと思います。

次回６月か７月になりますが、皆様にも一緒にヒアリングした現場に行っていただいて、実際に自分たちの目で見て、聞いてそこから何かを掴みながら、考えていただきたいと思います。

最後に、「その他」の項目の中で、今後のことに係わって、事務局からお願いします。

【委員】

先ずこの大変なアンケートをまとめていただきました事務局の皆さんご苦労様でした。本当にきめ細かくて大変な労力を要したと思います。

第１回の委員会で末松教育長が「滋賀の教育の目指すところ」についていくつか話をされました。その中の「滋賀の生涯学習社会づくり」について話し合いを進めているわけですが、これからは学んだことを生かすことが肝心だと思います。

去年も社会教育委員として提言をさせてもらっていますが、生涯学習を支援する公民館や図書館などの社会教育施設で学んだことを気軽に学校で生かせることができれば、と思います。「学校を拠点とした」ではあまりにも学校サイドなので、「学校をきっかけとした」という話も出ていました。

公民館はちょっと行きにくいけれど自分の子どもの通っている保育園・幼稚園・小学校などはやはり行きやすいという方はかなりおられます。学校を応援しているうちにもっと地域も良くしていこう、自治会も何とかしないといけないということから「滋賀の生涯学習社会づくり」に繋がっていくと思います。その辺のところをもっともっと活発にしていくということを社会教育は考えていかねばならないと思います。

もう一点、このアンケートの結果をこのまま終わらせるのでなく、新任の校長研修や教頭研修、教務主任研修、コーディネーター研修などで出していただき、その研修には生涯学習課の課長とか参事などが顔を出されて説明していただきたいと思います。

学校と社会の連携・融合を声高らかにおっしゃっていただければ生涯学習社会づくりも一層進むのではないかと思っております。

【委員長】

だいぶん、みなさんの話を聞いていると、ヒアリングが楽しみになって来ました。今後の予定も含めて、事務局さん宜しくお願いします。

【事務局】

お手元の＜参考資料６＞。一番下の資料をご覧頂きたいと思います。今後の日程について書かさせていただいております。来年度の６月か７月に第三回委員会議を持つ予定です。ここでは、先程も申し上げましたように、実際に現場等々を見ていただこうと考えております。あと、どういう形でヒアリングをするのかということについては、委員長さんともご相談をさせていただき、叩き台を作った上で、委員の皆様方にもメール、ＦＡＸ等でいろいろご意見をいただきたいと思っております。そして、あと２３年度の末には、第四回目で、ある程度の方向性が示せればと考えております。

【事務局】

本会議での内容と直接関係はないけれど、「滋賀の生涯学習社会づくり」ということで、来年度から５年間の計画「つながりで未来を拓く　滋賀の生涯学習社会づくり基本構想」を作成中であり、これにつきましてはパブリックコメントを行いまして、委員の皆様方にも送らしていただいて、御意見をいただきました。結果は、＜資料４＞で１３人（団体）から延べ２８件の御意見・情報が提出されました。概要ということで、今回の特色といたしましては、「滋賀らしさ」を出したということと、前回の社会教育委員会議の提言でいただきました「地域のきずなづくり」ということがありましたので、それを今回の基本目標の中で、「まなぶ　いかす　つながる」という３点について、今回の基本目標として新たに設定させていただいたところでございます。これについては、県民をはじめ協議会の方でも、２月１４日に御意見をいただいたところでございます。３月中には、作成させていただいて４月には、しっかりしたものを委員の皆様にも見ていただくことになると思います。それを基本にしながら、今日お話しをいただきました「園・学校を拠点としたまちづくり」につながるような取組を考えていただければと思っております。

【委員】
今の関係で、生涯学習というのは、基本的に学校教育と社会教育の両方が入る訳ですね。今回、社会教育委員会議で、「学校・園を拠点とした」ということで、学校教育への関わりを取り上げていますね。一度、社会教育委員と教育委員とで最後でも良いので、意見交換があった方が良いのじゃないでしょうか。地域づくりの観点で、学校というのはすごく大切だということをやっているので、この基本構想ができる段階のどこかで、教育委員さんと社会教育委員さんの共通理解が必要であると思います。

【委員】
今、先生がおっしゃたことは、昨年答申を出した時に、末松教育長に言いました。末松教育長も前向きに検討するとおっしゃいました。

【委員長】
わたしは高島市の社会教育委員もやっているんですが、その時に、教育委員と懇談すると良くって、教育委員は何も知らないんですね、教育委員の方は社会教育委員が何をやっているのか全く知らなっくて、はじめてそういうことをやって、勉強になったということがありまして、わたしも懇談会に大賛成なので、検討を宜しくお願いいたします。

最後に一点だけお願いがあります。今後の予定なんですが、次回三回目、この社会教育委員会議は視察というものが中心になりますが、これだけの人数がいっぺんに行くと相手が萎縮されるわけですから、多分２グループぐらいに分かれて、いろいろ見ていただくという形になると思います。そうなった場合、三回目が終わったら四回目が最後のまとめになるのですが、お互い行ったところの情報交換もないまま、一体何をまとめるかということも相談せずになってしまいます。残念ながら、なかなか財政上会議のお金としては、四回分しかないというようなところで、できればお願いなんですが、７月に視察に行った後に、９月か１０月あたりに、ここは申し訳ないんじゃけれども、ボランティアで謝金なしで一度できたら会議を開かせていただいて、それぞれの情報交換とある程度のそこから出てきた課題や考え方をもう一回どこかでやっておかないと、３月に何にもまとめられないと思います。そういう意味で、自発的にと言いますか、謝金はでないのですが是非私としては、もう一回、７月と３月の間の９月、１０月に、この会議を開かせていただいて、意見交換をさせていただく場を設けさせていただきたいのですが如何でしょうか。もし、何も反対意見がないようでしたら、場所や日程の調整は事務局の方でお願いしたいと思いますがどうかよろしくお願いします。

少し、光が見えてきましたので、自分の目で見たところで、意見を出していただくと、それを基にまとめていけるのかということができると思います。反対意見がありませんでしたら、そういう形で進めさせていただきますので、どうか宜しくお願い致します。そのあたりを、事務局で計画をお願いします。これで、第二回の会議を終わらせていただきます。

【事務局】
皆様方、長時間に渡りまして有り難うございました。会議の終わりにあたりまして、生涯学習課田中課長がご挨拶申しあげます。

閉会

【事務局】
予定の時間を過ぎましても活発なご議論をいただきまして感謝しております。我々事務局でこういうアンケートをつめているとどうしても細かい所ばっかり目がいって、大きな視点が見えてこなくなってしまうということに陥ってしまいがちです。こういった会議で先生方から大所高所からご議論いただくことは非常にありがたいことであると思っております。
実際に現場を見る、現場に足を運んで、それから現場の方々から声を聞くというようなことから、良い取組、あるいは、こういう所はネックになっているのでは、またこういうところを必ず解決すれば、もう一歩前へ進めるのではないかと思っております。生涯学習課が何故この事業をしているのか、生涯学習社会づくりに資するというのが、最終的な目標で話を進めていければ良いと思います。会議のお金がないということで、先生方に非常にご迷惑をおかけすることが心苦しいのです。一番最初に社会教育費は一体どうなっているのかと御質問いただいて、昔は本当にお金があった頃には社会教育費というのは、年間６００億とかの信じられないような数字のお金が付いている時がありました。びわこホールとか建物系で沢山取られているということがあり、そういうような物の維持ということだったんです。現在は粛々とやっておりますが、少ない額をどうやって割り振るかということが、行政側の腕の見せ所であります。やはり実際に子どもに係わる 「学校支援地域本部事業」であるとか、それを支えるボランティアの研修とか、そこにお金を活用するのが、本筋ではないかと思っております。貴重なご意見をいただけるこのような機会や先生方にお集まりいただく所に、プロフェッショナルに対して、それ相応謝金が払えないというのはそもそもどうかなというのもあるんですけれども、ここは、子どものためには大人が涙をのんでという、心苦しい判断になるんですけど、先生方にはご協力いただいて、少しでも子どものために、生涯学習社会づくりのためにお願いする次第でございます。金が無い中で知恵を使うのが大事なんですけれども、取るべきお金はしっかりと取るべきだと思っております。生涯学習あらゆる社会教育全体として必要な時に期を逃さずしっかりと取ってゆきたいと思っておりますし、それ以外のところでは、お金を使わずに知恵を使うようにと考えていきたいと思います。今後ともご指導をいただきますようお願いいたします。